

論文の書き方 (ver.1.2)

論文の書き方は、人様々です。これが「正しい」書き方だ、というようなものではありません。ここに記したことも、私（浦上）なりの書き方であり、私の先生から教えられたり、経験的に学んできたこと、後輩や学生の論文を読ませてもらった中で考えたことなどを集めたものです。論文を書こうとする一人ひとりが、ここに書いてあることを単にまねるのではなく、それを参考にしながら自分のスタイルを作り上げることを期待しています。

1. 書き始めるにあたって

何のために書くのか

自分の考え、研究したことを単にまとめるという作業ではない。

自分の考え、研究したことを誰かに伝えるために書く。

（常に読んでくれる人のことを考えて書く）

誰に伝えるのか

指導教官、他のゼミ生に伝えるのではない。

ゼミに出てきていない他の学生、例えば他の学科の友達や2年生の後輩にもわかるように書く。

（「わかってくれるだろう」という思い込みや甘えは捨てる）

2. どのような構成で書くのか

一般的には...

問題、目的、方法、結果、考察、文献、の各パートから構成される。

バリエーションとしては...

方法、文献は必ず独立

問題と目的、結果と考察、という連合あり。

（個人的には、問題と目的という連合体を勧める）

結果と考察、総合的考察という構成も OK。

その他

表紙...タイトルと執筆者名

目次...表紙、目次はページに含めない。問題から文献まで通しページを付ける。

補足資料...必要であれば、質問紙や補足的データ（面接記録など）を付す。

3. 問題、目的の書き方

「問題」は、研究を始めるに至った問題意識を整理する。

「目的」は、この研究の目的を明確に示す。

「問題」と「目的」は切り離すことが難しいことがあるので、「問題と目的」という見出しでもよい。

これまでの私の経験からみた留意点...

「自分の努力を誇示するためのパートではない」

時に、「私はこれだけ調べたんです」というように、先行研究を事細かに紹介している論文に出会う。レビュー論文（実際のデータは取らず、先行研究を検討し、そこに共通する結果、または異なる点を探したり、その研究群の現状や限界、今後の方向性を指摘するような論文）では必要な作業であるが、みんなの行うような研究では、これを過剰に書くのは不細工である。自分の研究にとって大切なものであれば、きちん

と紹介する。あまり関係ないけど、紹介するほうがいいと思えば、「 についてはいくつかの研究が行われている（例えば、 ,1985; ,1989; ,1993 など）」というようにまとめてしまう。ほとんど関係がないと思えば、記載しない。このように、自分の研究にとっての重要性を評価し、それに従って記載の程度を変えることが必要です。

「自分の問題意識を後述しない」

よく、長々と先行研究を紹介し、その後で自分の問題意識を書いている論文に出会います。これでは、何のために先行研究が紹介されているのか、読み手にはわからなくなってしまいます（書いている人は分かっているのですが）。ちなみに、2, 3本の先行研究紹介程度なら問題はありませんが、先行研究の紹介が長くなるようだったら、自分がどういう意図を持って紹介しているのか、その点がわかるように、先に問題意識を書いておくということが必要でしょう。

「概念間の関連を明確に」

例えば、親子関係と友人関係の間に関連性があるだろうという仮説を持っていただきます。このような場合に時に見受けられる書き方が、親子関係についての先行研究を紹介する、次に友人関係の研究を紹介する、そしてその紹介だけで「関連性があると考えられる」とまとめてしまうものがあります。これでは、「どうして関連性を仮定できるのか」がわかりません。研究は、多くの場合、人がやっていないことを行うのですから、本当にやりたいことに直接的に関連するような先行研究は少ないでしょう。だから、ここでその関連の可能性を論ずるのです。この点が論文を書くときに最も難しい点であることはわかっていますが、これを書かないと意味がありません。読んだ人が、「こういうふうになると、関連がありそうだなあ」と納得できるように、また納得させるように書いてください。

「段落の意味を考えて」 最重要！ 必ず点検すること！

これは、「構成を考えて」と同じ意味です。論文を書いていると、色々な書きたいこと、書かなければいけないこと、よく分からないことが出てくると思います。それをそのままワープロに綴ったのでは、読んでいる人は理解できません。「問題」や「目的」において、今書いている段落がどのような位置にあるものなのかを意識しながら書き進めてください。

例として、現在私が書いている論文の、「問題と目的」部分の段落紹介をしましょう。実際に問題意識を書いているのは第1段落、目的を書いているのが第6段落、あとは、そのすき間を埋め、自分の考えを表明していく段落です。この研究では、6段落で構成されています。字数は2,400字程度になっています。それぞれの段落の内容は、以下の通りです。参考にしてみてください。

1. 現状の問題点の指摘：学生の就職への取り組みが不十分であることが現状の問題であり、就職活動を持続的に行うことに影響を与えている要因について考察することが必要。
2. 論文がよって立つ理論の紹介：このような要因について考察する際、Banduraによって提唱された自己効力という概念が有用である。
3. 先行研究の紹介と未知な部分の指摘：自己効力と、それに導かれる行動の関連についての研究紹介と、自己効力が行動の「持続性」に影響を与えるという仮説については、まだ明らかにされていないことの指摘。
4. 未知な部分の解明に向けての提案：進路選択行動として就職活動を取り上げ、その持続性の指標となり、また Bandura の仮説を検証するのに適したデータ収集方法を提案。
5. 提案した方法の紹介：実際に研究で利用する研究方法の詳細な紹介。
6. 予測される結果：提案した方法によって、自己効力が行動の「持続性」に影響を与えることがどのように表現されるかについて仮定する。

問題や目的が書き上がったなら、上記のように段落ごとのまとめを作り、並べてみると、構成におかしいところが有るか無いか分かりやすくなると思います。また上記のよ

うなプロットを作ってから書き始めるのも一案です。

問題や目的がきちんと書ければ、論文としては半分以上できたと考えても良いでしょう。最大の難所ですので、しっかりと書いてください。

4. 方法の書き方

どのような方法で研究したか、その材料を説明する。

それを読んだ人が、全く同じ研究を繰り返すことができるだけの情報を含めること。

主な留意点...

調査対象は、どのような人たちか、何人か？

どのような質問紙を使ったのか、それは何を尋ねるものなのか？

回答方法は？

(補足資料の活用を考えても可)

5. 分析の仕方

目的に沿った分析をする。

(常に、「私は何をしたかったのか」ということを念頭に置ながら分析すること)

6. 結果の書き方

どのような結果が得られたのか、正確に書く。

(どのような検定を行ったのか、など)

あいまいな表現 (特に比較表現) に気をつける。

比較を示すために、「多い - 少ない」「高い - 低い」といった表現を使うことがあります。ここで気をつけておいてほしいのが、何を比較の対象として「多い」とか「高い」と言っているのか、という点です。また、時に一般的に考えられている事象の程度と比較した場合の結果 (というよりは、その論者の主観的判断) を書きたい場合もあります。例えば、ある大学生グループでは、プリクラを写したことのある人が 25% であった場合、あなたはそれをどのように判断しますか？それを「経験者は 25% しかいなかった」と書いても良いでしょうか。「しか」と表記できる理由があればかまいませんが (論拠はちゃんと示す)、論者の主観的判断でしかない場合には、慎重に言葉を選んでください。

図表を適切に利用することを考えて。

目的に照らし合わせて、必要な結果のみを書く。

(「ついでに、こんな分析もやってみました」という結果は、基本的には論文に掲載しない。自分の腹のうちにおさめておくことが必要。ただし、それが自分の議論にとって発展的に寄与しそうなものであれば、最後に書く。その時には、分析の意図と結果の寄与について付記することを忘れずに！)

図の書き方

「Figure 1 ...」というタイトルを付け、図の下に記入する。

Figure と数字の間は半角空ける。ピリオド (.) は不要 (× Figure.1)

Figure に統一しましょう。「図 1」というのは、なし。

通し番号も 2-1 というのは、なしにしましょう。

数字は半角文字

表の書き方

「Table 1 ...」というタイトルを付け、表の上に記入する。

Table と数字の間は半角空ける。ピリオド (.) は不要 (× Table.1)

基本的に、縦の線は使わない (どうしても必要なときは利用する)。

Table に統一しましょう。「表 1」というのは、なし。

通し番号も 2-1 というのは、なしにしましょう。

数字は半角文字

数字

基本的に、小数点以下2もしくは3桁で表示。それ以下は四捨五入。

相関係数、係数などは、「0.22」ではなく、「.22」と一の位の0をとる。

文章中の数字は、一桁であれば全角文字を、二桁以上であれば半角文字を使う。(例えば、「8年間」、「3歳」と、「25年間」、「19歳」)

7. 考察の書き方

考察を書く前に

ここらあたりまで書き進めてくると、自分の研究の目的をすっかり忘れてしまっていることが多いようです(奇妙なことですが、事実、そのようにしか読めない論文ができてくるのです)。そのために、考察を書く前に、自分の研究の目的は何であったか、結果として得られたものは、その目的とどのように関連しているのかを、再度、意識的に認識しようとしてください。

まず最初に、目的と結果の整合性について議論する。

(解明したかったことについて、結果から何が言えるのか、何が分かったのかを記す。先に仮説を立てていた場合、結果はそれを支持したのか否か。うまくいかなかった場合は、なぜうまくいかなかったのかを記す。)

今回の研究でわかったことと、そこから推測されることは、区別できるように書く。

(ここが混乱する場合が多い。この2つは別物であることは分かってもらえると思う。「～であった」「～であることが明らかになった」「～が影響しているのであろう」「～であると推測できよう」など、語尾に注意して書いてほしい)

最後に、今後の研究の展開(今回の問題点や今後の方向性)を少しだけ記す。(あまり多く書きすぎないこと。反省ばかりでは、この研究は何だったんだろうかと読者が思ってしまう。)

8. 「結果」と「考察」について

「結果と考察」とまとめてもよい。

(書きやすい方で書いてください)

9. 文献の書き方

何を書くか

論文中に記載のあるもの(引用文献)についてのみ、文献として明示します。時に、参考文献(論文中に記載してはいないが、研究途中で参考にした文献)についても記載しているものがありますが、それは胸の内に秘めておいてください。

並べる順序は

アルファベット順に並べます。

編著は

編著の本自体を引く場合は、編著者名を記します。その本の中のある章の場合は、その章を担当した執筆者の氏名を引きます(編著者の名前にしないこと)。例えば「落合良行 1993 親離れとはどうすることか 落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一著 青年の心理学 有斐閣 Pp.139-151。」

その他は、「心理学研究」や「教育心理学研究」を参考にしてください。

(「発達心理学研究」は、形式が少し違うので注意!)

10. 見出し

見出しは、大体、次のような順序で使ってください。つまり、中央大見出しの文のまとまりの中に、さらに見出しが必要であれば、横大見出しを使う、ということです。

1. や (1), などの番号を使う人が多いのですが、乱発しないこと。

中央大見出し

「問題と目的」などと書くとき。行の中央に置き、その上下は一行空ける。

できればゴシック体、もしくはボールド(太字)にする。

横大見出し

「方法」の中の、「調査時期」などを書くとき。行の左端におき（一文字空けない）、その後は、改行後、一文字分空けてから書き始める。できればゴシック体、もしくはボールド（太字）にする。

横小見出し

「方法」の中の「手続き」の中で、複数の尺度を説明するときなど。行の左端から、一文字空けて書き、その後は改行せず、一文字もしくは二文字分空けてから書き始める。

その他

主な結果を羅列するときなど、行に番号を付けるときは「1 . . .」。
一文の中で番号を付ける場合は、(1)... , (2)...もしくは(a)... , (b)...

11. タイトル

わかりやすく、内容を代表しているもの

当たり前のことですが、これがなかなか難しい。よく、(大きな内容) + (一研究 or 一考察) というタイトル（例えば、「大学生の自己受容に関する一研究」）を付ける人がいますが、あまり好ましくありません。内容がよくわからないからです。サブタイトルを加えてもよいので、もう少しわかりやすいものを目指してください（例えば、「大学生の自己受容 - 入学直後における変化の様相 - 」: あまりうまくないかも）。

いつタイトルをつけるか

タイトルは、論文を書く前、というか、研究を始めるにあたって考える必要があるでしょう。それが最もよい方法の一つであることはわかっていますが、ここでは違う方法も記しておきましょう。私が時に使う方法なのですが、論文を書く前に考え、書いた後に確定する、というスタイルです。書いているうちに、論の力点が少し変わってきたり、結果に合わせて（本当はあまりよくないのですが）方向が変化したりすることがあります。最初に決めたタイトルに縛られて、内容と不整合になってしまったら悲しいので、最初に付けたものが“絶対だ”という意識は持たないほうがいいでしょう。

12. その他

「心理学研究」や「教育心理学研究」を参考に書いてみてください。
早め早めに相談を！